

2017度 カブトガニ幼生生息調査結果



1 はじめに

カブトガニは、約2億年前からほとんど形を変えておらず、「生きている化石」と呼ばれ、生物学的にも貴重な生物である。しかし、沿岸の埋立て等による産卵場・生育場の消失、水質汚濁等の様々な要因により絶滅の危機に瀕しており、環境省レッドリストで絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。かつては広い範囲で生息していたが、現在山口県内では山口湾、平生湾及び千鳥浜の3沿岸域でしか確認されていない。榎野川河口域・干潟自然再生協議会では、カブトガニワーキンググループ（グループリーダー：山口カブトガニ研究懇話会 原田直宏代表）が中心となり、山口湾のカブトガニ生育場等の保全を目的とした活動を進めている。

本稿では、2006年から地域住民や大学等の協力により実施している「カブトガニ幼生生息調査」等の結果について報告する。

2 調査方法

(1) 調査場所

山口湾において砂泥質で生息数が多い長浜、南潟を調査した（図1）。

(2) 調査手法

ベルトランセクト法により実施した。あらかじめ設定したセンサスルート（調査ライン）上を1～3人で歩き、1ライン当たり2m幅で発見したカブトガニ幼生について、①個体数、②前体幅（図2）、③発見地点を記録した。長浜では16m間隔で20ライン（1,020m）、南潟では60m間隔で5ライン（1,000m）を設定した。



図1 調査場所

(3) 調査日時

- 長浜：2017年8月20日 11:40～13:50（大潮、最干13:40）
- 南潟：2017年9月 8日 13:30～16:30（中潮、最干16:00）

(4) 調査人数

- 長浜調査：43人（20組）
- 南潟調査：8人（5組）

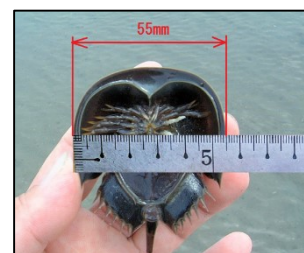


図2 前体幅の計測

3 調査結果

(1) 発見個体数

長浜で654個体、南潟で259個体が確認された（図3）。一時期は増加傾向にあったが、近年は減少している。2017年は、過去5番目に多く確認された。干潟底質の変化、調査精度等の影響が示唆されるが、明確な理由は明らかとなっていない。

ライン別では、長浜は西側（南潟側）のライン11～20の個体数が大きく減少し、南潟は沖側のライン4が2013年から大きく減少傾向にある（図4、図5）。

(2) 推定個体密度

調査範囲から試算した1ヘクタール当たりの推定個体密度は、長浜160個体/ha、南潟259/haであった（図6）。2012年以降、南潟の個体密度が長浜よりも多くなっている。

(3) 齢数の構成

前体幅から幼生の齢数を推定した。2006年には約7割が7齢で構成されていたが、近年は若い齢数の割合が増加し、多様化がみられている（図7、図8）。

4 環境学習・啓発活動

(1) カブトガニ観察会

長浜調査と併せて、小学生等を対象にしたカブトガニ観察会を開催した。
参加者は、54人（うち子どもが28人）だった。

(2) 報道

TYSテレビ山口、YAB山口朝日放送、NHK山口放送局、山口新聞、宇部日報社の取材があった。

5 おわりに

山口湾のように、ボランティアや学生等の多くの協力を得て、大規模に生息状況を調査している地域は無く、貴重なデータが蓄積されている。本ワーキンググループの活動は、国連生物多様性の10年日本委員会の「生物多様性アクション大賞2017（まもろう部門）」に入賞しており、絶滅の危機に瀕しているカブトガニを守るための重要な活動である。今後も調査を継続するとともに、住民等に対するカブトガニ保護の啓発に努めていきたい。

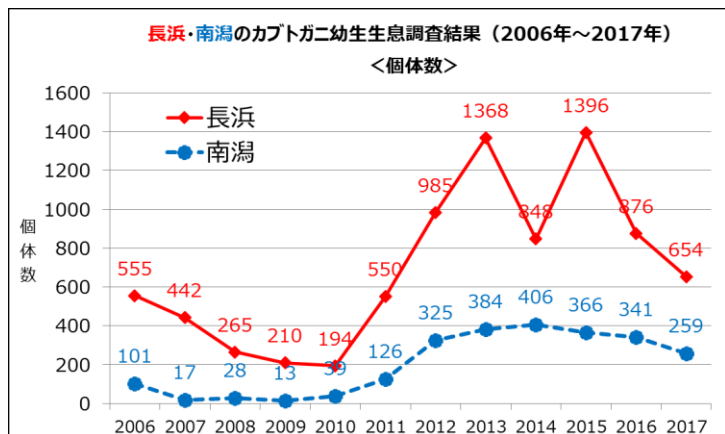


図3 カブトガニ幼生の発見個体数

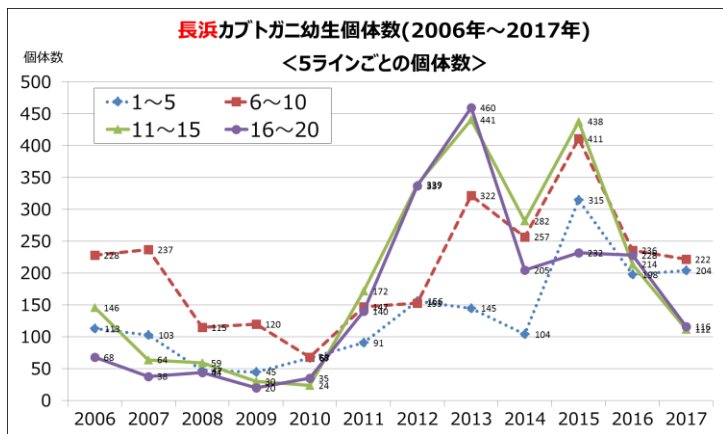


図4 カブトガニ幼生の発見個体数（長浜ライン別）

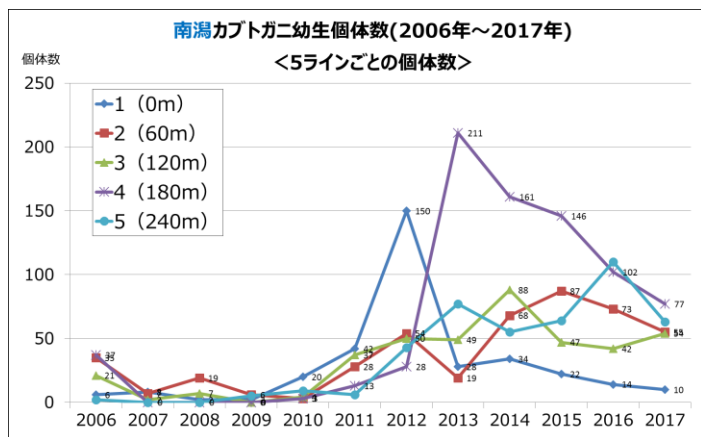


図5 カブトガニ幼生の発見個体数（南潟ライン別）

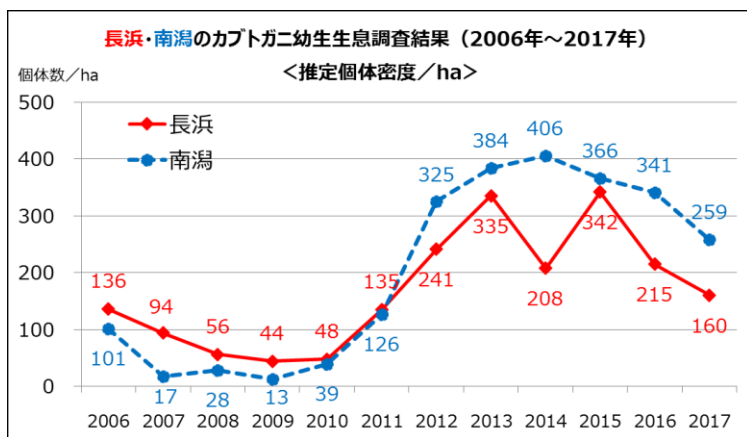


図6 カブトガニ幼生の推定個体密度

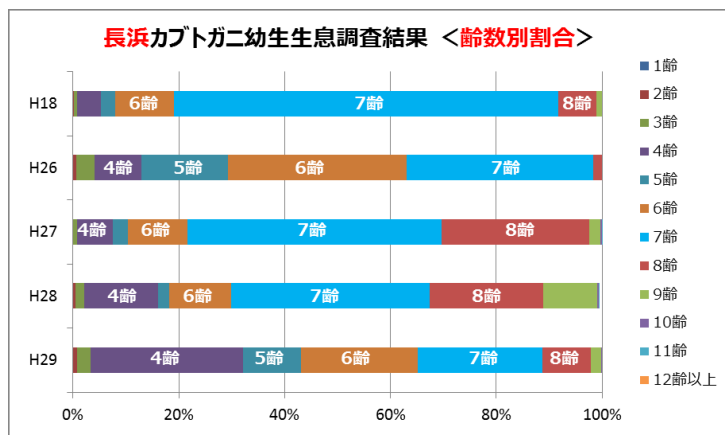


図7 長浜で確認されたカブトガニ幼生の年齢

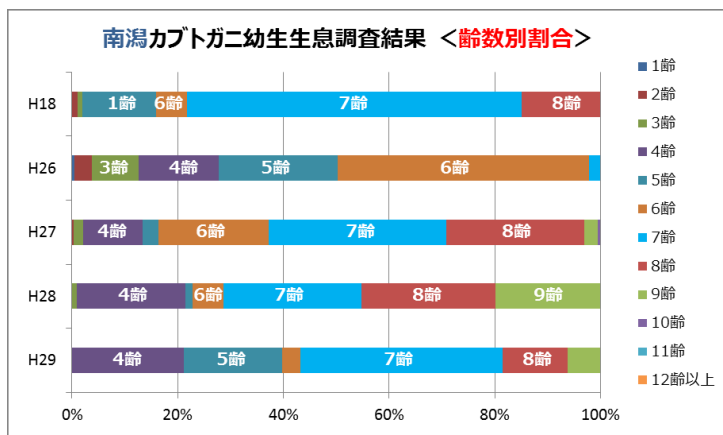


図8 南潟で確認されたカブトガニ幼生の年齢